



# かがやき

～一人一人のウェルビーイング～

かんがえる  
かんばる  
かよさる  
かきたる

時津町立鳴鼓小学校  
学校だより R6年度第10号

令和6年10月31日  
文責：校長 今井大輔

## 素敵な発表が満載！

10月20日(日)に開催いたしました「なづみっ子発表会2024」は、おかげさまで盛況のうちに幕を閉じることができました。当日は、子供たちの輝く笑顔と、温かいご家族、そして地域の皆さまに見守られ、本当に幸せな時間となりました。心より感謝申し上げます。

今年度も、各学年が一生懸命練習した成果を、個性あふれる発表で披露してくれました。あつという間の1時間半でしたが、子供たちの成長を感じ、参観者一同、感動のひとつときとなったと思います。

各学年の発表の様子は、ホームページに写真添えて掲載しておりますので、ぜひご覧ください。



## 大豊作でした！

今年も、左底の小坂さん、左底シニア会、久留里万寿会の皆さまのおかげで、無事稲刈り・脱穀を終えることができました。今年はおもち米に挑戦し、予想以上の収穫量で、粳すりもスムーズに進み、もち米の出来栄もバツグンです。12月には、このもち米を使って4・5年生が餅つき大会を開催します。地域の方々の温かい交流の中で育まれたお米を、味わえるのが今から楽しみです。



## どんぐり博士に变身！

今年も、1年生は「どんぐり博士」に变身！ながさき県民の森(森林館)のボランティアスタッフの皆さまのおかげで、楽しい「どんぐり教室」を開くことができました。どんぐりの帽子は何が違うのかな？どうすればうまく回るのかな？など、子供たちはたくさん質問をしながら、どんぐりの秘密を学びました。自分で作ったどんぐりごまを回して遊ぶ姿は、キラキラと輝いていました。

クヌギ、コナラ、マテバシイなど、たくさんの種類のどんぐりを観察し、名前を覚えた1年生は、最後に行われた「どんぐり博士テスト」にも見事合格！「どんぐり博士認定書」を手にした。子供たちは大喜びで、毎年、楽しい体験をさせていただき、本当にありがとうございます！

## すばらしい発表でした！

10月26日(土)、時津カナリーホールで開催された「読書感想発表・ビブリオバトル大会」に、本校から鮫島環心さん(1年2組)と永富瑛汰さん(5年2組)が出場しました。2日前の全校発表会でも堂々とした姿を見せてくれた二人ですが、本番ではさらに磨きがかかった発表で、会場を魅了しました。また、発表後のインタビューでも、落ち着いて的確に答え、堂々とした様子でした。

今回の大会を通じて、二人は貴重な経験を積みとともに、読書の楽しさを改めて感じる事ができたことと思います。



## つばやき

鳴鼓小の3階から眺める大村湾は、息をのむ美しさである。青い海、そしてそれを囲む緑豊かな山々。その絶景は、子供たちの心に深く刻まれ、きっと大人になっても忘れられない、ふるさと時津の象徴となるだろう。

こんな素晴らしい環境で学ぶことができることは、子供たちにとってどれほど幸運なことか。入学した当初から、毎日のように目にする景色に慣れてしまいかもしれないが、この恵まれた環境は、決して当たり前前のものではないと思っている。

先日行われたなづみっ子発表会では、4年生が地域の方々に教えていただいた銭太鼓浮立を披露した。地域の方々の温かいご指導のおかげで、子供たちは伝統文化に触れ、貴重な体験をすることができた。今回は、生演奏まで快く引き受けてしてくださった。

また、稲作や様々な作物の栽培活動も、地域の方々との連携があつてこそ実現している。

鳴鼓小では、このような地域の方々との交流を通して、子供たちは自然と触れ合い、感謝の心を育んでいる。これらの経験は、子供たちの心の成長に大きく貢献すると信じている。

そして、将来、鳴鼓小での体験や景色に想いを馳せることを願っている。



みんなちがって みんないい～（R6その2）

～共生社会をめざして～

前回「発達障がい」について、簡単にお伝えしました。今回は「発達障がい」の中で最多といわれるADHD（注意欠陥多動症）についてお伝えします。

ADHD（注意欠陥多動症）は、注意・集中力の欠如と多動、そして衝動性が見られる疾患です。ADHDの子供たちは、集中力が続かなかつたり、落ち着きがなかつたり、思ったことを我慢できずにすぐに行動してしまうことがあります。例えば、授業中に先生の話聞いていなくて、窓の外を見ていたり、クロームブックでこっそりと学習と関係ないものを見て遊んだりします。また、授業内容と関係のないことを突然話し出したり、離席や机や椅子をガタガタさせたりすることもあります。教師の注意では改善されず、これらのいくつかの言動が、長期間続くと、ADHDと診断されることが多いです。

このような特性の子供たちは、集団活動において、困り感をもって生活しています。例えば、授業中、学習課題について、小集団や全体で話し合い活動を行います。その際、自分の考えに固執し、友達や教師の考えを聞こうとせず、学習内容を理解できないことがあります。

このように、集団生活の中では、困り感を抱えてしまうことがあるのですが、素晴らしい能力があるとも言われています。「マインド・ワンダリング」という言葉をご存じでしょうか。翻訳すると「心の徘徊」という言葉なのですが、要するに、考えがあっちに行ったり、こっちに行ったりすることを表しています。この働きは創造性と密接に関係していることが分かっています。私たちの生活を豊かにするための電気製品などを発明した人の中には、ADHDの特性をもっている方がいらっしゃいます。これは、ADHDの方がもっている素晴らしい能力の1つです。

さて、学校では、授業だけでなく、休み時間にも数名の友達と小集団で活動します。ADHDの子供たちは、これまで述べてきたようなことから、周りの友達に理解されず、困り感をもって過ごしてしまうことがあります。この困り感が長い時間続くと、自己肯定感が低くなり、「うつ病」などの新たな問題が生じる場合があります。

このような問題を防ぐためには、子供たちの困り感が発達の遅れから生じているのかを、早期発見し、子供たちと関わる大人がADHDの特性について正しく理解し、適切な対応をすることが大切です。

ADHDの適切な対応について、基本となるのは、子供の行動を観察し、困り感を発見し、どのような支援が有効なのかを考え、実践していただくことです。例えば、学習で使った物を所定の場所に片付けることが苦手な子供がいたとします。まずは、「机の中に片付けようね」などの声掛けを行います。声掛け支援を続けて、片付けることができればいいのですが、状況が変わらない時には、手立てを変えてみます。片付けた後の写真を見えるところに貼ったり、できたときにシールをあげたりするなどを試してみます。試していく中で、最も有効な手立てが見えてきます。できるようになる時間は、子供によって違いますが、継続していくと、必ず状況が変化します。このとき大切なポイントは、できたことや努力したことをしっかり褒めることです。それと、できていたのにできていないとき、叱らないことも大切です。片付けなど、多くの子ができていたようなことは、以外と褒めてもらえないことが多いのですが、ADHDの子供にとっては、大変難しく、できることは困難な場合が多いです。そのことを理解し、「できて当たり前」ではなく、「努力しているんだね」という気持ちで接していくことで、子供との信頼関係もできてきます。そのことで、子供たちは安心して学校生活を送ることができるようになります。